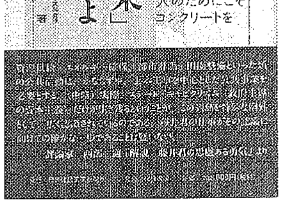
日刊 建設工業新聞

SANKEN
ENVIRONMENTAL ENGINEERING
空気と水の環境創造企業
三建設備工業
〒103-0014 東京都中央区日本橋蛎殻町1－35－8 TEL03（3667）3431
http://skk.jp

『正々堂々と「公共事業の雇用創出効果」を論ぜよ』

著者に聞く

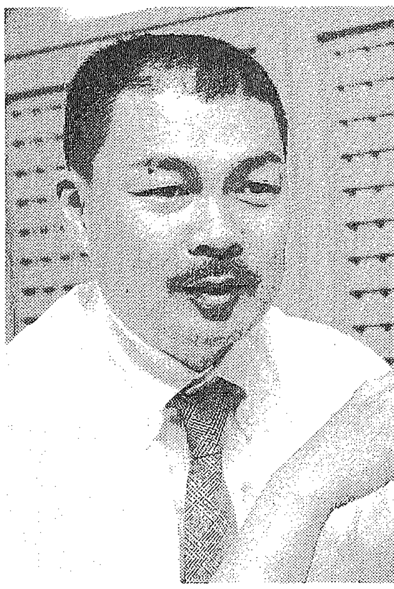
本紙寄稿欄「所論諸論」の執筆者でもある藤井聡・京大大学院工学研究科教授が、公共事業に関するエッセー集を出版した。タイトルは『正々堂々と「公共事業の雇用創出効果」を論ぜよ―人のためにこそコンクリートを』（発行・日刊建設工業新聞社）。公共事業に対する逆風が吹き荒れる中で、なぜこのような本を世に出したのか。藤井氏は、不要論だけが増幅されて反論が難しくなっていると現状を指摘した上で、「正々堂々と一般に分かる言葉で公共事業の必要性について発言し、議論することが必要だ」と訴える。（編集部・佐々木修）



正々堂々と「公共事業の雇用創出効果」を論ぜよ
人のためにこそコンクリートを
藤井聡 著

相模書房、価格800円＋税

京都大学大学院
工学研究科教授
藤井 聡氏



世論・マスコミは現実と乖離（かいり）
不要論増幅、「沈黙の螺旋」に

今こそ発言し、議論尽くしてビジョン描け

――出版の動機は。

「公共事業に反省・改良すべき点はあるが、世論やマスコミの論調は現実と乖離（かいり）しているという思いがあった。過剰に否定的な意見が多く、書籍や雑誌、新聞を含め肯定論は限られている。国民の情報源は一般マスコミであり、不要論、悪玉論が繰り返されれば、公共事業が悪者だと思うのは当然だ。不要論だけが増幅され、反論が難しい状況が生まれ、ますます悪い方向へ流れていく。公共事業に関する『沈黙の螺旋（らせん）』＝注参照＝と言えるのだが、『公共事業が必要だ』ということを一般の人の目に触れる形で、一般の人が使う言葉で伝える必要があると考えた」

――タイトルに込めた思いは。

「ケインズが理論的に明らかにした通り、公共事業には莫大（ばくだい）な雇用創出効果がある。データを見ても公共事業の関係者は多く、日本国民の2～3割が公共事業で食べている現実がある。その家族が食事をしたり、服を買ったりする効果も含めると、雇用創出効果は極めて大きい。これについてきちんと論じることこそ、経済不況脱却の鍵になる。参院選でもこの点は議論されておらず、すべての政党が景気第一と言いながら公共事業の雇用創出効果を論じていない」

「『沈黙の螺旋』のなせる技だが、経済を分かっている政治家であれば、公共事業の雇用創出効果を論じるべきだ。言うべきことは言う必要があり、この本では談合問題や高速道路の無駄、地球温暖化を含め、言いづらいことでも正々堂々と論じている」

◎ ◎

――鳩山前政権が掲げた「コンクリートから人へ」とのキャッチフレーズに対する考えを。

「『11年度は公共事業費がこれ以上削減されない』などと喜んでいる場合ではない。極端に削られて維持されるのであり、『コンクリートから人へ』のロジックはまだ生きている。事業仕分けでも（公共事業関連が）やり玉に挙がったが、まだまだ票が掘り起こせるからだ。（政権与党は）『民主主義であり、民意に忠実に政策を行って何が悪いのか』と言うかもしれないが、民主主義が間違うこともある。民主主義と言論の自由は表裏一体であるべきだ。全体主義的な社会風潮がインフラの周りにあり、公共事業に関する議論を封じられているような状況が存在する」

「これまで公共事業、特に土木の関係者は多くを語らず、黙っていることが美徳だった。黙っていても理解してくれる人が大半を占めているなら美徳だが、現在はそうではない。今こそ関係者は、リスクを取りながらいろいろなところで発言するべきだ。発言することで議論の可能性が生まれる」

――公共事業に関するビジョンの必要性をどう考える。

「公共事業にはいろいろな人がかかわるが、同じ方向を向かないと実現せず、ビジョンが必要になる。（住民や関係者の）合意形成ができない原因は、ビジョンが共有されていないからだ。かつては『高度経済成長』というビジョンが行政や政治家、専門家、国民に共有されていた。その後は専門家により道路局、河川局などの部局ごとに分割され、国民には関係がなくなってしまった。公共事業は、国民が必要だと思ってこそできる国家事業だ。いろいろな人の思いを聞いて議論を尽くし、ビジョンを描き上げる努力をしてこなかった」

「個人的に、ビジョンには『生存』という言葉が重要だと思っている。日本は防災面でも、経済的にも脆弱（ぜいじゃく）な状態にある。地震や洪水、土砂崩れが懸念される上、グローバリゼーションの中で経済は不安定化してデフレの状況だ。きちんと生き残っていけるというのは重要なビジョンであり、経済に対しては内需拡大、防災に関しては首都機能移転といった措置が取られれば、国民も安心して活力が出る。これらにしてもインフラの役割は大きい」

◎ ◎

――建設業界の現在の状況をどうみる。

「建設産業は事業規模の縮小で不安だと思う。国自らが（縮小を）推進することで、食べていけない人をたくさん出すのは、社会正義の面からもおかしい。いわば国家的リストラであり、あまりにも急速に進めるのは、国がやるべきこととは思えない」

「建設業を見殺しにしているともいえるが、そこには『いじめ』と同じ構造が存在する。『沈黙の螺旋』によって（誰もかばわないので）、何の根拠もないのにいじめられっ子が発生し、先生であるはずの政府が、さらに弱い者いじめをしている。こんな不正義がまかり通ってよいはずがない」

「みんなが言わないので、建設業をいじめてもよいと思っている。だからこそ正々堂々と公共事業について論ぜよと言っているのだ」。

□注「沈黙の螺旋」＝ドイツの政治学者、ノエル・ノイマンが提唱した政治心理学の理論で、人間を「孤立をおそれるひ弱な存在」とみなす。孤立を恐れるあまり、他人の顔をうかがいながら発言と沈黙を繰り返した結果、特定の意見しか言えない風潮が充満する状況を指す。